



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カフカ：逃走の系譜
Author(s)	西川, 智之; NISHIKAWA, Tomoyuki
Citation	独語独文学科研究年報, 15, 9-32
Issue Date	1989-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25778
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_P9-32.pdf



カフカ

— 逃走の系譜 —

西川智之

1

「カフカの主要な創作期に、プラハは最も典型的にプラハであり、またカフカ的であった。」（ウルツィディール 38）

これはカフカの同時代人ウルツィディールの回想である。19世紀末から20世紀にかけて、プラハはウィーンやベルリンなどとともにドイツ語圏の芸術の中心であった。そしてカフカの主要創作期とは、第一次世界大戦とチェコスロバキアの独立という大きな歴史の流れに重なっている。では、最も典型的なプラハとはどういう街で、それがなぜ最も典型的にカフカ的と呼べるのだろうか。

領土内に多くの民族をかかえるハプスブルク帝国（オーストリアーハンガリー帝国）を象徴するかのように、プラハはチェコ人、ドイツ人、ユダヤ人の共生する多様性の都市だった<1>。ウルツィディールは、プラハを「チェコドイツーオーストリアーユダヤの総合」を「何百年もの間与え続けてきた」街と特徴づけている（ウルツィディール 93）。しかし、こうした総合とは、整然とした統一体を形造っていたという意味ではない。19世紀末に、プラハの民族運動は頂点に達していた<2>。人口の多数を占めながらもドイツ人に支配され続けてきたチェコ人は、1848年の革命以降、民族運動を展開し、徐々に文化的・経済的な発展を遂げていたが、より一層の平等を求めて戦

< 1 > 1900年当時のプラハの人口構成は、チェコ人 415,000人(92.25%)、ドイツ人10,000人(2.2%)、ユダヤ人25,000人(5.6%)で、ユダヤ人のうち日常語をチェコ語と登録したのは14,000人、ドイツ語と登録したのは11,000人であった（プロートb 77）。だが日常語をチェコ語と登録したユダヤ人の中には、自分の子供はドイツ語学校へ通わせ、商売上そうしたほうが有利だったからチェコ語に登録する者も多かった。（Vgl. 矢田 229 und ビンダー a 25）

< 2 > その原因となったのは、ボヘミア・モラヴィア両州で、それまでのドイツ語のほかにチェコ語も公用語に採用しようとしたパデニーの言語令であった。Vgl. 矢田 161f. und 263ff.

った。一方、チェコ人の台頭に危機感を抱いたドイツ人の間にも、チェコ人の民族運動への反動としてドイツ民族至上主義が強まった。基本的にはプラハの民族闘争は、ドイツ人对チェコ人という構図を取るのだが、その対立の中でユダヤ人たちは「両面の戦いに巻き込まれるようになった。ドイツ人の民族主義者たちは、ユダヤ人がそうする権利がないのにドイツ人を気取って外国人とともに大学に押しかけると非難し……一方スラヴ人の土地でも資本主義への反対は、反ユダヤ的性格をおび、……ユダヤ人の多くがドイツ人びいきの態度をとっている点に、ユダヤ人を拒否するいま一つの理由を見いだしていたのである」(矢田 235)。カフカの友人のユダヤ人作家オスカー・バウムも、ドイツ人小学校に通っていた時のチェコ人とドイツ人の小学生の間で繰り広げられた「市街戦」のために失明したのだった。

オーストリア内のユダヤ人は、経済的・文化的にも長年ハプスブルク帝国を支え、また帝国への忠誠心も高かったのだが(Vgl. 矢田 235f.)、常に反ユダヤ主義にさらされてきた。特に19世紀末には、急進的なドイツ民族主義者ゲオルク・フォン・シェーネラーの唱える反ユダヤ主義がボヘミアのドイツ人の間に支持者を増やしていった(Vgl. 矢田 160)。こうした、後年のヒットラーにもつながっていく反ユダヤ主義に対して、ユダヤ人の多くは個人生活に引き籠もり、政治的運動にかかわることを避けたが、一部のユダヤ人はシオニズムに身を投じた(Vgl. ビンダー a 28)。特に、20世紀に入り鎮静化していた反ユダヤ主義が大戦中に再び激しくなり、また、ロシア軍の侵攻のために東方から多くのユダヤ人難民がプラハに流入してからは、シオニズムの信奉者も増えていった(Vgl. ビンダー a 30 und 69f.)。カフカの友人マックス・プロートも早くからシオニズムに傾倒し、プラハのシオニズム運動の中心になって活動した。

このように、チェコ人・ドイツ人・ユダヤ人それぞれが民族意識を高め、また、それぞれの民族運動が刺激あって相乗的な展開を遂げたことも事実であり、それがハプスブルク帝国を解体させ、チェコスロヴァキアの独立を可能にした大きな一因であることも否定できないが、一方、こうした「民族闘争は感情的対立といった面が強く」、「1914年前には領内諸民族の中で真に帝国の解体を唱えていたものは少数であった。」(矢田 174)<3> 多くの政治集會が開かれ、軍隊や警察が出動するようなデモや衝突が起こることもあったが(Vgl. ハース 21ff.)、「とにかくその頃の

< 3 > その理由は「ハプスブルク帝国が君臨した諸地方は、経済資源のうえから相補う関係にあり、軍事的防衛の見地からも一体化する方が有利だった」(矢田 171)からである。チェコ人・ドイツ人を問わず、政治家たちは、帝国内の各民族の平等に基づく連邦制的君主国を望んでいた(Vgl. コーン 73ff.)。

政治状態はそれほど大したこともなっていないのである（ヴァーゲンバッハ 87）。

こうした民族対立は文化の面での民族意識にもつながっていったが、ドイツ語系の作家たちのなかには、それがきっかけで、かえってチェコの文化に目を向けるようになった者もいた。カフェ・アルコやカフェ・モンマルトルはそうしたブラハの若き芸術家のたまり場であり、交流の場であった（Vgl. ビンダー a 82）。ヴァーゲンバッハが厳しく指摘するように、ブラハに住んでいながらチェコ語のできないドイツ語系作家たちのチェコの文化への関心は、「ただチェクへの善意の愛、ロマンチックなポーズ」にすぎず（ヴァーゲンバッハ 60）、その作品も「秘教的で、血なまぐさく、淫蕩で、気取っている」（ヴァーゲンバッハ 63）ものであったとしても、こうした「ときおり平穏になることはあったが、おおむね政治的に動揺し闘争心に満ちた……共生と相互作用」（ウルツィディール 34）こそ、当時のブラハを活性化した動力源だったのである。

プロートはシオニズムにかかわる一方で、チェコの音楽や文学にも強い関心を示し、特にヤナーチェクを世に広めるのに努力した<4>。カフカ自身もプロートを通じて多くの芸術家と知り合いになるが、カフカのチェコとの接し方は独特であった<5>。若い頃カフカはチェコ人の集いや討論会に顔を出している。また「ブラハのドイツ系ユダヤ人の大多数が顧みなかった「チェコ国民劇場」」へも通っていた（アイスナー 46）。そして何よりも他のドイツ語系作家と違っていた点は、カフカがかなり正確なチェコ語を使えたことである。ミレナへのある手紙でカフカは、「ドイツ語は私の母国語ですから、私にとっては自然なものです。しかし、チェコ語の方が私にはずっと心がこもったもの感じられます」（全集Ⅶ 15f.）と書いている。もちろん、これがチェコ人のミレナへ宛てた手紙であることを割り引いて考えなければならないとしても<6>、カフカのチェコ語への愛着は<7>、貧しいが素朴な人々への共感や、園芸や農作業への興味とともに、チェコ民族

<4> 当時のブラハの状況は、プロート b (Der Prager Kreis) に詳しく描かれている。

<5> Vgl. アイスナー 42ff., ヴァーゲンバッハ 60ff. und 85ff.

<6> 別の手紙でカフカは、ミレナのチェコ語の時評について、彼女のチェコ語は音楽であり、「決然としたもの、情熱、愛らしさ、そして何よりもまして、透徹した賢明さという点で」チェコの作家ボジェナ・ニェムツォヴァーに似ていると書き送っている。Vgl. 全集Ⅶ 20

<7> カフカはチェコ語の「チロブルドー！」という挨拶が気に入って、プロートに向かってよくこの挨拶を使ったという（Vgl. プロート c 71f.）。また、後年、結核で労働者災害保険局に休暇延長の申請をしなければならなかった時、カフカは、妹オットラの夫であるヨーゼフ・ダヴィット（彼はチェコ人で、国語浄化論者であった）に局長あての手紙をチェコ語に

の土との結びつきへのあこがれの表出と考えられる。

「ドイツ性」、「チェコ性」、「ユダヤ性」、「オーストリア性」という「四つの源泉」を持ちながら（ウルツィディール 33）、そのどれにも所屬しえないというのが、プラハのドイツ系ユダヤ人の運命だった。「チェコ・プラハのドイツ系ユダヤ人は、いわば異邦人性と異邦人願望の肉化であり、おのれ自身の民族をもため民族の敵であった。」（アイスナー 33）そしてカフカは、この異邦人性を誰よりも強く感じていた。家族の中ですらカフカは異邦人だった。

「ところで私は家族のなかで、つまり最も親切で親しみ深い人たちのなかで、他人よりもよそよそしく暮らしています。」（全集Ⅶ 230）

しかし、この異邦人性は否定的な側面しか持たないのだろうか。ある手紙の中で、マックス・ブロートが「君は君の不幸の中で幸福なのだ」とカフカに書いてよこしたのに対し、カフカは、それは「当然、同時に『幸福のなかの不幸』というのを含んでいるのだが、おそらくカインにはそんな意味で烙印が押されたのだ」と答えている（全集Ⅸ 202）。「不幸の中で幸福である」というブロートのこの言葉を、カフカはさらにフェリーツェ・パウアー宛ての手紙でも引用し、これはブロートの「一種の同時代批判」でもあると述べ、その意味を次のように説明している。

「それは世界との同調の喪失を意味し、その印を付けている者が世界を破砕し、世界をまたよみがえらせることができず、その破片によって追放されることを意味します。しかし彼は不幸ではありません、なぜなら不幸とは生の一部であり、この生を彼は除去したのですから。しかし彼はその事実を明晰すぎる眼で見ますが、それはこの領域では不幸と似たようなことを意味するのです。」（全集Ⅺ 709）

プラハのユダヤ人たちは、カインの烙印をおされ、世界との同調（*der Gleichschritt mit der Welt*）を喪失していたというのが、ユダヤ人が世界の歩みに付いて行けなかったのか、それとも彼らの歩みが速すぎたのか。そして「不幸の中で幸福である」とはどういうことなのか。

老帝フランツ・ヨーゼフに象徴されるように、ハプスブルク帝国は動脈硬化をきたし、国内・国外の動きに対して適切な処理を取れずに解体する。しかし「まさに時勢に遅れていたがゆえに、王政は一般的な没落の徴候を先取りしていたし、また万事において遅れていたオーストリアなればこそ、資本主義的世界の腐敗過程、その末期の問題提起が早められた。これこそオーストリアのパラドックス」だったのである（フィッシャー 141）。多民族国家であるがゆえに、帝国内をまとめ

訳してもらい、それに改めて自分で「適当な数の誤り」を付け加えて、申請書を提出したというカフカらしいエピソードもある。Vgl. 全集Ⅻ 78ff.

ることができず、長い歴史にピリオドを打ったハプスブルク帝国であったが、それは逆に超民族国家へ移行する可能性も秘めた「史上稀にみるユニークな存在」(矢田 2)でもあった。パーヴェル・アイズナーは「民族が存在しなければ、人は生きていけない。民族が存在しなければ、人は法と秩序に従って<真実のなかに>(dans le vrai)生きることにはできない」(アイズナー 35)と言うのだが、その後のプラハの歴史、世界の流れを見るならば、そう簡単に言い切れないものがある。1918年の独立後もチェコスロヴァキアがチェコ人、スロヴァキア人、ドイツ人などの複数の民族を抱えていたことに変わりはなく、この民族問題がナチス・ドイツ侵略の口実となり、1938年にチェコスロヴァキアは解体される。第二次世界大戦後は東側ブロックに併入されたが、68年の「プラハの春」はソヴィエトの武力介入を受け、自由化、独自の社会主義路線への要求は弾圧された。つまり「現在の世界は、もはや民族の独立完成だけでは問題の真の解決とならず、一種の広域経済圏を基礎としなければ民族が発展できない史実を示している」(矢田 344)のである。その意味では、ハプスブルク帝国そしてプラハは、現在の世界状況の先例であったのだ。「ドイツ性」「チェコ性」「ユダヤ性」「オーストリア性」が反発しあいながらも混じりあって、プラハ発展の推進力となっていたのだ。カフカは、ココシュカの描いたプラハの大作との関連で、次のように言っている。

「絵のなかで、屋根がみな飛び散ってゆく。丸屋根は風をくらった蝙蝠傘です。街全体がいまにもガバと持上って吹き飛びそうです。—が、プラハは不動です—あらゆる内部の葛藤にもかかわらず。ここにまさしくプラハの驚異があるのです。」(ヤノーホ 123)

異なった民族のせめぎ合い、そこにプラハのエネルギー源があった。そして、すでに見たように、ドイツ人からもチェコ人からも憎まれたユダヤ人は、その内部の葛藤のはけ口であり、プラハの矛盾と驚異を身をもって体験する運命にあった。ユダヤ人は、カフカの祖父の世代に自由を獲得し、カフカの父の世代では、都市へ出て社会的な成功を手にする者が多かった<8>。しかし、それは同時にユダヤ性の喪失でもあった。カフカは、父の苦勞話をよく聞かされた。

「父が今の人たちの、とりわけ自分の子供たちの幸福な境遇をたえずあてこすりながら、自分が若い頃ずっと辛抱しなければならなかった苦勞について話すのを聞くのは不愉快だ。父が……早くも十歳のときから冬でも朝早くから小さな車を村から村へ押して歩かなければならなかったことは、だれも否定はしない。—ただし……これらの正しい事実は……断じて次のような結論を許すものではないのだ。す

< 8 > 1949年の欽定憲法で自由を手にするまで、ユダヤ人は職業や移転の自由が認められていなかっただけでなく、その数を一定に保つため結婚も制限されていた。Vgl. ビンダー a 22ff.

なわち、ぼくが父より幸福だったとか・・・・・父と同じ苦勞をしなかったのだから、ぼくは父にどこまでも感謝しなければならないという結論である。」(全集Ⅶ 155f.)

ユダヤ人ゲッターを抜け出し、ヘルマン・カフカは現在の裕福な境遇を築き上げた。だが、ゲッターからの脱出は「世界との同調の喪失」の始まりでもあった。ユダヤ教は無縁なものになり、ブラハの葛藤の中で生きるための精神的な拠所はなくなった。幸にして、カフカの父の世代は生きることによって、それを嘆いている暇はなかった<9>。しかし、「明晰すぎる眼」を持ったカフカは、伝統を喪失した自分たちがそれを取り戻すためには、苦闘せねばならぬことを知っていた。

「私の知るかぎり、私は彼らの中で最も西ユダヤ的な人間です。というのは、誇張して言えば、私には一刻たりとも安らかな時間が与えられていないということです。私には何一つ与えられているものはなく、すべてを自分で獲得しなければならないのです。現在や未来だけではありません。過去すらもそうであり、どんな人間でもおそらく生まれながらに持っているもの、それすら自分で獲得しなければならないのです。」(全集Ⅶ 190)

東方ユダヤ人の劇団、特にイジャク・レーヴィとの交際や、大戦中、ユダヤ人難民のためのボランティア活動をフェリーツェに勧めたのも、失われたユダヤ性を求めてのことと考えられるが、プロートとは違い、カフカのシオニズムへの態度には、いつもある種の距離が置かれていた<10>。

以上のようなブラハおよびハプスブルク帝国の多民族性、ユダヤ人の民族性喪失という点のほかに、ブラハの持つ地理的特徴も見えておかななくてはならない。

「この国はすでに果てしない広がりには達していながら・・・・・ひとりでにぐんぐん大きくなり、広がっていきます。実際どのような攻撃を行なってもこの国の中心に達することは困難でありますために、この国は近隣諸国にとって一つの脅威となっています

<9> 「あなたは年に4回だけ教会堂へ行かれましたが、あなたはそこではすくなくとも、信仰を真剣に考えようとしている人たちよりも無関心派に近かったのであり、祈りを儀式として辛抱よく果たしていただけです。」(「父への手紙」全集Ⅲ 150) 「1900年頃には、ほとんどすべてのユダヤ人が—それはカフカやプロートの父親もということだが—4日ユダヤ人(Vier-Tage-Juden)と呼ぶことができた。彼らは、ユダヤ教の最も重要な3回の祝祭日とフランツ・ヨーゼフⅠ世の誕生日である8月18日にシナゴグへ行った。また、彼らのユダヤ教の教育は普通ひどくおそまつなものなので、ヘブライ語の祈禱書の原典を、もう理解できなくなっていた。」(ビンダー a 67)

<10> Vgl. ヴァーゲンバッハ 90, 全集XI 656

し、またすでに長い間そうでありました。」(矢田 105)

カフカの『シナの長城』を連想させるようなこの文は、チェコ民族主義者バラツキーの1848年3月革命後の民族議会招待状への返書である。もちろんその後半世紀以上を経て崩壊寸前のハプスブルク帝国にはそのまま当てはまらないにしても、1916年86歳で亡くなるまで、プラハから遠く離れたウィーンで、帝国の象徴として君臨していたフランツ・ヨーゼフが、プラハに住む者に、『シナの長城』の皇帝のような、半ば伝説的な人物に思われていたとしても不思議はない<11>。

こうしたハプスブルク国内での地理的条件に加え、プラハの街並もカフカ的な迷路になっていた。階段やアーケードやバヴラッチェ(回廊式バルコニー)でつながりあう Durchhaus、あるいは旧ユダヤ人街の、往々にして袋小路に終わる狭い小路(Vgl. ビンダー a 97)。「中世・ルネッサンスそしてバロックの歴史的諸層が重なりあって……町の景観のあのような、いわば植物的な成長を遂げている」(ビンダー a 95) プラハでは、「聖と俗」、「公共の場と暮らしの場とが混然として、繋がったりだぶったり」(池田他 34)していた。そしてカフカはこうしたプラハの Durchhausの抜け道や建築物に精通していた(Vgl. ヤノーホ 68ff.)。

西ヨーロッパのユダヤ人であるカフカは、実生活でも狭い抜け道を、ドイツ人とチェコ人の間の隘路を歩かなければならなかった。「何一つ与えられて」おらず、「現在や未来」だけではなく「過去すらも」自分で獲得しなければならぬ西欧ユダヤ人のカフカだったが、様々なものが入り混じり、迷路のように入り組んでいたプラハだからこそ、「内部の葛藤にもかかわらず」不動だったプラハだからこそ、あの不思議な作品を生み出すことができたのだ。カフカの作品は「その栄養と毒性を没落するハプスブルク家国家から取り出している。まさにそれゆえにこそ、それは地方的な限界を越えて無国籍性を獲得したのだ。」(フィッシャー 116) 確かにその無国籍性とは、コスモポリタニズムとか民族の違いを越えた普遍的真理・普遍的人間性を肯定的な形で表しているので

<11> Vgl. フィッシャー 134, ヴィリー・ハースは、ギムナジウム時代のフランツ・ヴェルフェルへの思い出の中で、フランツ・ヨーゼフのプラハ訪問の前日のエピソードを紹介しているが、そこでは、老教師のこっけいなほどの帝国への忠誠心と、もはや老帝をおとぎ話の人物くらいにしか思っていないギムナジウム生の間の世代の格差が表れている(Vgl. ハース 28f.)。また、ハンス・コーンの『ハプスブルク帝国史入門』に収録されているヨーゼフ・レトリヒのフランツ・ヨーゼフについての回想からは、一人息子のルドルフの自殺や皇后エリーザベトの暗殺という不幸を経験した老皇帝の、孤独で哀れな一人の人間としての姿をかいま見ることができる(Vgl. コーン 263ff.)。

はなく、あくまでも民族性の喪失にすぎず、カフカ自身が言うように「ドイツ人の子供をゆりかごから盗んで来て、大いそぎでなんとか一人前に仕立て上げたジプシー文学」(全集IX 370f.)かもしれない。しかし、ジプシー文学だからこそ民族の境界線を越え出る可能性を持つのである。ユダヤでもドイツでもチェコでもオーストリアでもなく、様々な要素が混然と混ざり合っていて、そのどれかに定義をしばらくとすれば、その定義から逃れて行く。カフカの作品自体がプラハの裏町の路地や Durchhausの抜け道を通して、われわれ読者を撒いてしまうのだ。

2

1904年、当時まだ20歳だったカフカは、友人のオスカー・ボラックに宛てて書いている。

「僕はおよそ自分を咬んだり、刺したりするような本だけを、読むべきではないかと思っている。僕たちの読んでいる本が頭蓋のてっぺんに拳の一撃を加えて僕たちを目覚めさせることがないとしたら、それではなんのために僕たちは本を読むのか? 君の書いているように、僕たちを幸福にするためにか? いやはや、本がなかったら、僕たちはかえってそれこそ幸福になれるのではないか、そして僕たちを幸福にするような本は、いざとなれば自分でも書けるのではないか。しかし僕たちが必要とするのは、僕たちをひどく痛めつける不幸のように、僕たちが自分よりも愛していた人の死のように、すべての人間から引き離されて森のなかに追放されたときのように、そして自殺のように、僕たちに作用する本である。本は、僕たちの内部の凍結した海を砕く斧でなければならない。そう僕は思う。」(全集IX 25f.)

カフカがここで言っているのは自分が「読むべき本」のことであるが、カフカの死後半世紀以上経った現在、彼自身の作品がそのような効果を与え続けている。そして、カフカ自身にとっては「書く」という行為そのものが、上述のような性格を持ち、「自殺のように」作用したのである。

カフカは労働者災害保険局での昼の仕事と深夜の執筆という二重生活を送っていた。1913年6月26日の手紙で、カフカはフェリーツェに「書くこととオフィスとは互いに排除」し合うと書き送っている(全集XI 385)。ブロートは、カフカが「パンのための職業」と「文学」とを切り離したことを「高貴なる誤謬」と考え(ブロートa 88)、「このパンのための職業という点にその後彼が苦悩の世界へとさらに深く突き進んで行ったことの根源があるのであり、この苦悩の世界がついには病気と死に通じていたのである」(ブロートa 101)と言っている。しかし、文学的な仕事だけで生計を立てなかったからこそ、「パンのための職業」と「文学」の間で悩み苦しんだからこそ、

カフカの作品の登場人物たちの苦悩や不幸も書かれ得たのであり、文学の障害であるはずの役所で
の仕事や家族・恋人との確執が、逆に作品を生み出すエネルギー源になっていたのだ。それが最も
良く現れているのが、1912年と1914年の創作上の二つの大きなピークである。

どちらの時期も、大きな要因になっているのはフェリーツェ・パウアーである。カフカがフェ
リーツェと初めて会ったのは1912年8月13日、9月20日には最初の手紙を送っている。そしてその
2日後、「22日から23日にかけての夜、晩の10時から朝の6時にかけて一気に」「判決」が書かれ
る。10月初めから12月6日までには、「失踪者」の第7章の途中までと「変身」を書き上げている
<12>。そしてちょうどこの時期に、工場主である義弟が出張している2週間、家族と義弟の出資す
る工場（カフカも名前だけは共同経営者の一人になっていた。Vgl.全集IX 98）の経営を監督する
ように両親に強く求められ、創作を妨げられる。カフカはプロート宛てに、「一切の責任を放棄」
するために自殺を考えたと書き送る<13>。

カフカは外界と遮断された静かなところでなければ書けなかった。ちょっとした物音やわずかな
中断も、作品の流れを妨げる障害であった。1912年11月24日のフェリーツェ宛の手紙では、愛読
書のある漢詩集から詩を引用している。それは、夜もかなり更けているのにいつまでも本を読んで
いて床に就かぬ夫に、妻が怒り、今何時か知っていますかと尋ねる、という内容だが（Vgl.全集X
104）、以後フェリーツェへの手紙でしばしばこの漢詩のことをカフカはほのめかす。1913年1月
14日から15日へかけての手紙でも、初めにこの漢詩について触れてから、次のように書いている。

「いつかあなたは、ぼくが書いているあいだ、そばに座ってほしい、と書いてきました。
考えてもごらん、そうしたらぼくは書けないでしょう。……書くときは、い
くら孤独でも十分ということはなく、書く人の周りが静かすぎるということはなく、夜
はまだあまりにも夜でなすぎるのです。……ぼくにとって最良の生活法は、
筆記道具とランプを持って広々とした、隔離された地下室の最も内部の部屋に居住する
ことでしょう。……それからぼくはなにを書くことでしょう！どんな深みから、
ぼくはそれを引き出すことでしょう！苦勞もなしに！というのは極度の集中は苦勞を

<12> 「1912年9月22日から12月6日までの数週間、つまり74日間には400ページ以上の原稿が
書かれたのであって、おなじ時期にカフカは自分の婚約者に、ときには10枚をこえる長文の
手紙を60通以上もかいている。」（ヴァーゲンバッハ 94f.）

<13> その手紙を受け取ったプロートは、カフカに内緒で手紙の写しを母親に見せ、カフカの工
場監督の義務を解かしている。Vgl.全集IX 113ff., プロートa 101ff.

知りません。ぼくはそれを長いこと続けられないでしょう。そんな状態でさえ避けられぬかもしれない最初の失敗で、すごい狂気に陥らざるをえないでしょう。なにを考えているのですか、最愛のひとよ？地下室居住者を敬遠しないでください！」（全集X 225f.）

こんな手紙をもらって、混乱しない女性がいるだろうか。毎日三通も四通も手紙が送られ、ある時は無理をしてまで返事を書かないようにと言ったかと思うと、次の手紙では今日はあなたからの手紙がこなかったと嘆く。ある時は愛のせりふであふれているかと思うと、違う手紙では「あなたがいれば、ぼくは何も書けなくなるかもしれません」と書いてある。しかもその同じ手紙は、自分を「敬遠しないで下さい」という言葉で終わっている。実にカフカのやり方である。

カフカはフェリーツェとの結びつきを求める一方で、執筆のためには絶対的な孤独を必要としていた。「判決」を書き終えた日の日記の興奮ぶりは、カフカがなぜそれほどまでに孤独を必要としたのか、カフカにとって書くという行為が何だったのかをわれわれに説明してくれる。

「この『判決』という物語を、ぼくは22日から23日にかけての夜、晩の10時から朝の6時にかけて一気に書いた。……物語をぼくの前に展開させていくことの恐るべき苦勞と喜び。……ただこういうふうにしてしか、つまりただこのような状態でしか、すなわち、肉体と魂がこういうふう完全に解放されるのでなければ、ぼくは書くことはできないのだ。」（全集VII 212）

1911年に神智学者のシュタイナーを訪ねた時にも、カフカは、文学的な分野で「透視の状態に近い状態」を体験することがあり、そうした時には「どのような着想であれそのなかに浸りきっていて、いかなる着想でもそれを現実化し」、「自分の限界ばかりではなく、人間的なもの一般の限界も感ずる」と話したという（全集VII 44）。こうした記述を読むと、カフカにとっては、作品そのものよりも、それを書いている際の陶酔状態が目的だったのではないのかという疑いが湧いてくる。仕事や家族、恋人すらも書くことを妨げ、創作の熱狂を醒ます障害であった。書くことによってカフカの「肉体と魂」は外界の障害から「完全に解放」された。だが、創作への衝動を刺激し、そこへ逃げ込んだ時の忘我の状態を一層高めるためには、逆に、外界の障害が必要だったのではないのか。フェリーツェへの異常な数の手紙も、「一切の責任を放棄する」ための自殺への衝動も、「書く」という非難場所に自分を追い込む役割を果たしただけではないのだろうか。

外界から陶酔状態への逃亡というのは、この時期に書かれた作品の内容ともつながっている。すでに述べたように、1912年の集中的な創作熱の中で書かれたのは「判決」「変身」「失踪者」である。「失踪者」は1913年1月まで断続的に書き続けられ、その後長い中断をはさみ、1914年10月に再び執筆が試みられる。1913年1月までに書かれた部分は、第7章までと断片1の大部分。1914

年10月に断片1の続きと「ブルネルダの出発」「オクラホマの野外劇場」の章が書かれた。「失踪者」のこの部分の比較は後ほど行うことにして、ここでは1912年の諸作品の特徴を見ていくことにする。「判決」と「変身」の共通点はすぐに分かるであろう。「判決」では、父の商売を発展させ間もなく結婚しようとしているゲオルク・ベンデマンが、老いぼれたと思っていた父親に弾劾され、死刑判決を受ける<14>。判決自体は正当性をもたないのに、ゲオルクは父に逆らわず、判決に従って橋から飛び下りる。「変身」では物語の始まりですでに、父親と息子の優劣は逆転している。父親に代わってそれまで家計を支えてきたグレゴールは、虫に変身し、ヨボヨボの老人だった父親は、務め出してから再び元気を取り戻す。「判決」の息子対父親の対立に、登場人物として母親と妹が加わるが、家族の中で息子が孤立し死んでいくという構図は変わらない。本来、家族は個人と社会をつなぐパイプの役割を果たしている。個人は家庭から社会へ出て、父親になり、自ら新たな家庭を築いて行く。「判決」、「変身」とも、主人公は社会の最小構成単位である家族の中ですら孤立し、適応できずに、また息子から父親への発展を遂げることなく死んでいく。

「失踪者」は、一見、他の二つの物語とは違うように見える。主人公は「女中に誘惑され、そのために女中に子どもができてしまったので、貧乏な両親にアメリカに送られた16歳のカール・ロスマン」であり、物語の冒頭で家族から社会への船路にあるのだから。また、火夫や巨大なオキシデンタル・ホテル、ならず者のロビンソンとドラマルシュなど、現代の労働機構、社会のアウトサイダーも登場し、家庭の枠には収まり切らない点も多い。しかし、父親対息子の対立の構図は同じである。伯父の家からも、ホテルからもカールは追放される。「失踪者」は、主人公のより下方への転落という筋で物語が展開するが<15>、その転落の判決を下すのは、父親に代わる伯父やボーイ長である。「判決」や「変身」と同様、主人公は彼らに逆らうことができずに没落していく。

このように1912年の作品では<16>、主人公は家という枠から外へ出れずに、父親を越えること

<14> 登場人物の立場の逆転はすでに「ある戦いの記録」で見られる特徴である。

<15> カール・ロスマンの下方への転落パターンについては、拙論「カフカの『失踪者』—不在なる語り手の機能と読者の役割—」 in: 「北海道大学文学部独語独文学科研究年報 第11号」 1984 でも触れた。この点に関してはVgl. ビンダー-b 88 und 149f., ポリツァー 217

<16> カフカは「判決」、「変身」、「火夫」を「息子たち」という題の作品集の形で出版したいと考えていた。「『火夫』と、『変身』・・・と、『判決』とは、外的にも内的にも一体をなしてしまして、これらの間にはあからさまな、そしてそれ以上にひそやかなつながりが

ができずに死んでいく。カフカ自身にとっても「書くこと」そのものが、それに陶酔して外界、特に父親から逃避することが目的であり、作品には社会の入り込む余地はほとんどなかった。

それでは1914年の作品はどうであろう。1914年は世界史の上では第一次世界対戦勃発の年であるが、カフカにとってはフェリーツェとの婚約と約一ヶ月後の婚約解消の年であった。そして第一次世界大戦が現代社会のひとつの大きな転機であったように、1914年はカフカの作品でもひとつの分岐点になっている。1913年には、いくつかの短い断片以外には何も書かれなかった。それは1914年に入っても同じだった。1914年6月1日、カフカはフェリーツェと婚約し、7月12日にはその婚約を解消している。そして、それを待っていたかのように、8月から翌年の1月にかけて再び集中的な創作の波が押し寄せてくる。それはあたかも、創作のインスピレーションを刺激するためには、婚約と婚約解消というショック療法が必要だったかのようである。10月にカフカは合計二週間の休暇を取り、書くことに没頭した。この年の大晦日の日記には次のように記されている。

「8月から仕事をした。全体として仕事は少なくないし、また質も悪くはない。しかし一切合財含めてはくの限界まではきていないのだ、そうでなければならなかったほどには。……書いたもので未完のものは『審判』『ガルダ鉄道の思い出』『村の小学校教師』『副検事』その他短い書き出しが幾つか。完成したのは『流刑地にて』と、『失踪者』のなかの一章だけ。両方とも二週間の休暇中だった。」（全集Ⅶ 324）

二年前と同じように、今度の創作の波の端緒にはフェリーツェがいるが、もちろん二年前の状況とすっかり重なるわけではない。7月28日のオーストリアーハンガリーのセルビアに対する宣戦布告は、一週間以内には全ヨーロッパを巻き込む大戦へと発展する。義弟が招集されたので、カフカは再び工場に顔を出さなければならなくなる。妹のエリが二人の子供を連れて引っ越してきたので、カフカは家を出て、別に自分の部屋を借りて住むことになる。こうした外的状況の中で第二の創作ピークが始まるわけだが、その直前の8月6日の日記には次のように書かれている。

「文学の見地から見れば、ぼくの運命は非常に単純だ。夢のようなぼくの内面生活を描写するための才能は、他のすべてのことを副次的なものにしてしまった。……内面生活の描写を除いては、他のいかなるものもついでぼくを満足させることができないのだ。しかし今や、そのような描写をするためのぼくの力はまったく当てにならず、おそらく永久に失われてしまったようなのだ。たぶんそれはもう一度戻ってくるだろうが、

あり、そこのところを表現するのに、たとえば『息子たち』という表題の本にまとめてみるといったことを、私は諦めたくありません。」（全集Ⅸ 128）

おそらくぼくの境遇がその力にとってはまったく不都合なのだ。」(全集Ⅶ 302)

実際は、この数日後に「描写のための才能」が戻ってきて新たな創作の波が始まるわけだが、それは1912年のように「夢のような内面生活を描写するため」だけに向けられるのではない。この部分に続く、同じ8月6日の記述は、社会に向けられたカフカの冷徹なまなざしを証明している。

「愛国行列、市長の演説。……これらの行列は、戦争の最もいやらしい付随現象の一つである。それは、あるときはドイツ人になり、あるときはチェコ人になるユダヤ商人どもから発しているのだ。なるほどこの愛国心は是認されてきた。しかし今のようにそれを声高に叫ぶことが彼らに許されたためしは一度もないのだ。むろん彼らはかなり多くの人を熱狂させている。組織化も上手だった。」(全集Ⅶ 302)

カフカは戦争などの社会の出来事に目を向けず、自分の個人的生活・内面生活に閉じ籠もっていたと言われることがあるが、戦争が始まってまだ10日もたっていないこの日の記述は、カフカが社会の表面的な流れに巻き込まれることなく、歴史の本質を見抜いていたことの証拠であろう。労働者災害保険局での仕事でカフカは社会の表層だけではなく、社会の底辺の悲惨や疑悶、官僚機構の非人間性に触れ、「夢のような内面生活」だけではなく、外界の描写を、それもより深い洞察を手に入れたのである(Vgl. プロートa 93ff., ヴァーゲンバッハ 84ff.)。

数日後、カフカはついに「審判」の執筆に取りかかる。8月15日の日記には次のようである。

「二、三日このかた書いている。これが続くといいのだが。二年前の時ほどぼくは完全には保護されていないし、仕事のなかに這いこんでもいない。それでもぼくは、自分の変わり映えのしない、空虚な、気違いじみた独身生活が、ある正当性を持っているという感じを手にいれた。ぼくはふたたび自分と対話を行なうことができ、そして完全な空虚のなかに入っても、それほど硬直することもない (Ich kann wieder ein Zwiesgespräch mit mir führen und starr nicht so in vollständige Leere)。ただこのようにしてこそ、ぼくにとっての改善があるのだ。」(全集Ⅶ 303)

「判決」の時のように「仕事のなかに這いこむ」ことはなくなった。とぎれとぎれではちゃんとした作品が書けないという考えは、依然として残っていた<17>。しかし今やその目的は、書くことによる「肉体と魂の完全な解放」ではない。カフカは自分自身との対話を客観的に行ない、「完

<17> 「断片的に書かれたものや、夜の大部分を使って(または徹夜して)書かれたのではないものは、すべて価値が低いこと、そしてぼくは自分の生活環境によってこの価値の低いものを書くように運命づけられているということが、あらためてよく分かった。」(全集Ⅶ 320)

全な空虚」に陥ることはなくなったのだから。

ゾーケルは1912年と1914年の作品の違いを、家庭悲劇からシステムへの、個人的体験から世界観<18>への移行と定義している。ヨーゼフ・Kの父親は死んでしまっている<19>。1912年の諸作品の父親の役割をシステム、組織が担うことになる（ゾーケル 125）。もちろん「審判」の裁判官やおじ、弁護士に、「流刑地にて」の前司令官に父親の姿を認めることもできる（Vgl.ゾーケル 125 und 203）。しかし、裁判官や前司令官は完全に神秘化・伝説化されており、一方、おじや弁護士は主人公のヨーゼフ・Kに対抗する力もないし、「判決」の父親のように復活することもない。ヨーゼフ・Kは、独身で「比較的短時日のうちにいまの高い地位にまでのし上」った（全集V 109）という点では「判決」のゲオルクと似ているが、この昇進も銀行という組織の中で行われるという点に大きな違いがある。ヨーゼフ・Kの相手は血を分けた父親ではなく、目に見えない裁判機構である。「流刑地にて」の士官は、新司令官との直接対決で敗れるのではなく、第三者の外国からの探検家の言葉がきっかけで自らを処刑する。「判決」「変身」では最終的な判決が主人公に言い渡されるのに対し<20>、「審判」「流刑地にて」では、死んでいく当人たちは判決の意味を知ることはない。「流刑地にて」の士官は、自ら「正義に遵え」という文字を体に刻もうとするが、望んでいたような文字は体験できないのだから。主人公たちの体験する死も「判決」や「変身」とは性質が異なっている。グレゴールは家族への「切ない愛情に胸をひたされ」ながら、自分は「消え去るべき存在だ」という「空漠とした安らぎにみちたこの内省」に身を委ねながら死んでいく（全集I 90）。ゲオルクは両親への愛を叫びながら死んでいく（全集I 45）。「判決」の最後の一文でカフカは「強烈な射撃」のことを考えたという（プロートa 144）。グレゴールもゲオルクもエクスタシーの中で死んでいく。それに対しヨーゼフ・Kは犬のように死んでいき（全集V 194）、士官は「約束された救済」は得られない（全集I 157）<21>。

<18> ゾーケルは、この世界観の第一の要素を権力への人間の全体的な服従という点に、第二の要素を実存哲学との結びつきに、つまり、もはや苦痛の中でしか人間は意識と肉体の分離がなくなるといふ点にあると考えている（ゾーケル 125f.）。

<19> 「父親が非常に若く死んでしまったので、実の父の心配を彼は一度も知らなかった。まもなく家をとび出してしまい、実の母の愛情は……彼をおびき出そうとするよりむしろ斥けようとしてきたのだった。」（全集V 203）

<20> 「変身」では妹の言葉が判決に相当する。Vgl.全集I 88

<21> 「士官の悲劇は、死刑という意味付与機能が「判決」の場合のように真理と調和しないと

筋の展開の面でも変化が見られる。「変身」では家族たちは生活のために働かなくてはならなくなる。家族の外界との接触の増加に反比例する形で、グレゴールの外界からの遮断と孤立が強まっていく。「失踪者」ではカールの下方への転落が筋になっていた。それに対し「審判」では、裁判そのものはいつまでたっても始まらない。筋の停滞が物語の筋になっている。この点にすでに「城」へつながる契機がある<22>。

「失踪者」の終章「オクラホマの野外劇場」も1914年に書かれたが、1912年に書かれた7章までと比べてみるとゾーケルの言う「個人的な体験」から「世界観」への移行が分かる。もちろんオクラホマの野外劇場でもカールは採用事務の際、三つ目の「一番はずれにあり、他のどの事務所より小さく、そのうえ低くさえあった」事務所ですら採用されるのであり（全集VI 215）、下方への転落という筋は続いているように思われる。また1912年に書かれた部分でも、オキシデンタル・ホテルの過酷な12時間勤務やブルネルダの隣に住む夜学生のように、社会批判的モチーフがないわけではない。しかし「どのくらい大きいかわからないほど」の大きさの（全集IV 211）、「誰でも歓迎」する（全集IV 207）というオクラホマの野外劇場では、「すべてのものが裁判所の一部」である（全集V 129）という「審判」の世界と同様に、物語の中心は個人から茫漠たる社会へ移行している。そして1914年の作品に現れるこの世界とは、ハプスブルク帝国およびプラハの特殊性と共通する部分が大きいのである。多様な民族性を統一的にまとめ上げる中心点などないにもかかわらず、ひとつの国家、街として活況を呈していたハプスブルク帝国、そしてプラハ。それはまた今日の世界の先駆けでもあった。もはや中心となる価値感などないにもかかわらず、国境や民族の違いを越えて世界のシステム化は進行している。知らず知らずのうちに「すべてのもの」がシステムに取り込まれていく。終章では今日のシステム化という観点からカフカを論じてみたい。

3

1914年8月から15年1月にかけての集中的な創作の後、カフカの創作の泉は再び涸れてしまい、

いう点に、死が真理のベールを取り除きはしない点にある。ゲオルク・ベンデマンやグレゴール・ザムザにとって宥和的な死はなお体験であったが、士官にとっては単に思い出でしかない。」（ゾーケル 134f.）

<22> 「かれ(K) は、追放されはしないが、任用もされない。……かれの全生涯は、永続的な誕生であり、終わることなき「世界への到来」（出生）である。」（アンダース 39）

1916年12月になってようやくカフカはまた筆を執る。ブロートは『城』の後書きで「ヨーゼフ・Kは、隠れたり、逃げたりする — <K>はしつこく押しかけ、いどみかかろうとする」(全集VI 398)と、『城』と『審判』の二人の主人公を比較している。城を恩寵の世界と解釈するかどうかは別にしても、このブロートの指摘は、1914年の作品と後期の作品の違いを正確に言い表している。

『流刑地にて』の士官は、旧態然たる処刑制度を遵守しようとして死んでいく。そしてそれを見守るヨーロッパからの旅行者は傍観者にすぎない。『審判』のヨーゼフ・Kは、30歳の誕生日の朝、目が覚めると逮捕されている。彼は自分の意志で裁判を呼び寄せたわけではない。彼には裁判機構を本気で解明しようという気持ちは見られず、最後には何の抵抗もせず処刑を受け入れる。それに対して、後期の作品の主人公たちは自らの意志で物語の発端を作り出す。『城』のKは物語の舞台となる世界へ、自分からやって来るのだから。後期の作品の主人公たちは、ひたすら目標を追求し、ある者はその目標を達成し、またある者はその目的追求の結果死んでいく。

目的を達成した主人公の典型は『学会への報告』のロート・ベーターである。彼が歩んだのは、身動きもできない檻から「人間という出口」(全集I 131)への道のりである。しかしこの出口は、自由へ通じているのではない。「あらゆる方向に向かって開かれている大いなる自由の感情」(全集I 126)とは関係ないのだ。またこれは逃亡のための出口でもない。「この出口には逃げたからとてたどり着けるものではない」(全集I 127)のである。この出口にたどり着くには、「鞭に追まわられて前進する」(全集I 123)ことを覚悟しなければならず、また出口をくぐり抜けても、その先は演芸場でしかない。出口を抜けることは、人間の世界に飛び込むことであり、ゲリラ的攪乱戦法である<23>。ロート・ベーターは人間に迎合してチンパンジーの存在を捨てたのではない。彼は生きるための道を自ら選んだのであり、そのことで「人間の批評を望んでは」いない(全集I 131)。彼は受け身のまま処刑を待ったりはしない。人間たちにチンパンジーとしての過去を捨て去ることを余儀なくされたロート・ベーターは、今度は人間社会に自分の「知識を普及すること」(全集I 131)を要求し、人間社会に混乱を引き起こすのである<24>。

ロート・ベーターと対照的なのが『穴巣』の主人公である。この動物にとっての出口とは、敵

<23> 「大変気のきいたドイツ語の言い廻しがあります。「繁みへ分け入る(姿をくらます) sich in die Büsche schlagen」というのですが、わたくしがしたのはまさにそれです、繁みのなかに飛びこんだのです。」(全集I 131)

<24> ロート・ベーターの調教を受け持った最初の人間は神経科に入院するはめになる。彼の教師たちの方がロート・ベーターに酷使されるのだ。(Vgl.全集I 130f.)

に襲われた時に逃げ出せると同時に、外敵が侵入する危険性も持つ諸刃の剣である。

「実際、出口というものは、たぶん救いになるどころか、むしろ命とりになりかねないものだ。しかし、にもかかわらず、出口はやはりひとつの希望であって、わたしは出口なしでは生きていくことができない。」(全集Ⅱ 142)

ロート・ベーターのように、生きるためには選択の余地がなく、一度出たしまえば元には戻れなかったのと違い、この出口は自分で造ったものであり、そこから出て行くのも自分を罰するためであり(全集Ⅱ 146)、再び戻って来ることが前提になっている。「穴巢」の主人公はあくまでも自分の巣に執着し、巣の外に出ても出口を外から観察するだけで、外界との交渉はない。この動物にとって自分の巣は独立したひとつの世界であり、外界とは出口を通じて接しているにすぎない。しかしこれは錯覚である。巣は世界のほんの一部にすぎない。巣へ戻ったこの動物は、シューシューという音に悩まされるようになる。自分一人の平安な世界など妄想にすぎず、実際にはこの巣も世界に取り込まれており、世界との対決なくしては自分の存在も保証され得ないのである。世界から逃走しようとしても、いつのまにか世界の中に吸収され、その一部にされてしまうのである。

ニクラス・ルーマンによれば、現代社会には各部分システムを包括するようなスーパー・システムは存在しない。現代世界は、たとえば身分階級や規範道徳などに基づいた、閉じたヒエラルヒー構造を取ってはいない。諸システムは開かれた状態にあり、あるシステムはそのシステム外の要素との関係で、常に調整が行なわれている(Vgl.ルーマンa 158)。システムの境界はシステム外環境に対して解放的であり、システム外の要素を取り入れていく際、その無規定な要素は選別され、システム内で把握可能な形に「標準化」される(Vgl.ルーマンb 48 und 77)。現在の社会はこうした選別、標準化を急速な形で行なっている。今や社会全体を貫くような、唯一の閉じられたスーパー・システムはなくなったが、システム自体が自己運動、自己増殖を進めている<25>。システムは常にその外にある要素を取り込んで、目まぐるしく姿を変えながら自己維持を図る。

「何か絶対的な到達点があるわけではない。走ることそのものが問題なのである。一丸

<25> たとえば経済の分野で見れば、多国籍企業はその例である。「今や多国籍企業という一つの資本蓄積者が、国境を越えて複数の産業を組織したり(水平分業)、一つの産業の生産工程の全体を組織したり(垂直分業)するようになったのである。」(恒川 39)

カフカはある時ヤノーホに次のように語っている。「資本主義とは、内から外へ、外から内へ、上から下へ、下から上へと連なる隷属性の組織です。一切が隷属し、一切が鎖につながれている。資本主義は世界及び人間の魂の一つの状況です。」(ヤノーホ 227)

となって走っている限り、矛盾は先へ先へと繰り延べられ、かりそめの相対的安定感を得ることができる。……こうして、近代社会は膨大な熱い前進運動として実現されることになる。」(浅田 100f.)

こうした現代社会の前進運動から逃れるにはどんな手段があるだろう。

「二つの可能性 — 自己を無限に小さくしようとするか、自己などもたないか (sich unendlich klein machen oder es sein)。後者は完成であり、したがって無為である。前者は開始であり、行為である。」(全集Ⅲ 38)

自己を無限に小さくして、それを完成した例は断食芸人である。「穴巢」の主人公とは違い、断食芸人は自分が見世物として世間に取り込まれていることを知っている。彼は自分の場所を檻に限定し、断食芸を極める日を待つ。そしてついに世間から忘れ去られ、彼の望みがかなえられる日が来る。だが、自己の存在を無限に小さくし、それを完成することは、所詮生の否定でしかない。

カフカはもう一つの可能性を扱っている。それはすでに見たように、ロート・ペーターのゲリラ戦術である。そのロート・ペーターと同じ系列に属するのが「城」のKである。アウト・サイダーのKは城一村に戦いを挑む。このロマーンで逃走するのは、主人公ではなく城の方である。到着の翌日Kは城を目指して歩き出すが、道は「ただ近づいていだけで、近づいたかとおもうと、まるでわざとのようにまがってしまうのだった。そして、城から遠ざかるわけではなかったが、それ以上近づきもしないのだ。」(全集Ⅵ 16) Kの接近を拒むのは、Kの当面の目標になるクラムも同じである。クラムに会うために待ち伏せをするKに対し、クラムはKが中庭にいる限り姿を見せず、Kが立ち去るのを待ってそりに乗り込み、逃げるようにして城へ出発する。

ロート・ペーターの目標が「人間という出口」であることがはっきりしていたのに対し、Kの目標である城が何なのかは、物語が進んでも依然謎のまま残る。城は、排他的で、閉ざされ、凍結した社会のように見える。村の教師は「百姓たちと城とのあいだには、たいした区別なんか」ないと言うのだが(全集Ⅵ 15)、われわれには身分制度によってはっきりと区別された全く違う世界のように映る<26>。しかし、それでは一体城はどんな世界なのかということになると、話は全く曖昧模糊としてくる。オルガの話では、クラムの外貌に関してできえ確定できないのである。

「クラムは、村にやってくる時と村から出ていく時とでは、まるで違って見えるそうです。ビールを飲むまえと飲んでからとでは違うし、目ざめているときと眠っている

<26> 「クラムさんは、お城の人です。それ以外のあの人の地位のことは全然抜きにしても、これだけでももうあの人の身分が非常に高いということです。」(全集Ⅵ 58)

ときとでも違い、ひとりのときとだれかと話をしているときとでも違う。また……お城にいるときは、がらりと別人のように見えるということです。村のなかにおいてさえ、彼にかんするいろんな報告にはかなり大きな食い違いがあります。……ただ服装にかんしてだけは、さいわい、どの報告も一致しています。いつもおなじ服装で、裾の長い黒い上着を着ているというのです。……つまり、彼を見た人の、そのときの瞬間的な気分や、興奮の程度や、期待あるいは絶望の無数の度合いなどによって、食い違いが生じるのです。」(全集VI 197f.)

クラムを見分ける唯一の手掛りは「裾の長い黒い上着」であり、村人たちが見るのは「ビールを飲むまえ」のクラム、「飲んでからの」クラム、「ひとりきりの」クラム等々である。クラムがビールを飲んだり、人と話をするのではない。村人たちがクラムを見る時には、クラムの主体は消えてしまい、種々の行為が、服装が、役人という社会の機能がその人間になり変わる。

だが、そうしたものの見方に最も囚われているのがKである。Kの頭の中にあるのは「なんとか希望をあたえてくれるようなものがあれば、なんでも利用しなくてはならないということ」だけである(全集VI 180)。クラムに近づくために、クラムと取引をするために、愛人である自分をクラムから奪ったのだ等々のフリーダの非難に対し、Kは「ある意味ではすべて正しい」と、あえて否定はしない(全集VI 177)。テキストの削除された箇所では、「もしおれがここで出会ったのがフリーダではなくて、このペービであり、この娘には城となんらかの関係がありそうだとにらんだならば……フリーダの場合にせざるをえなかったのとおなじような抱擁をしてその秘密を奪いとうとしたことだろう」(全集VI 361)と、Kの見方がさらに直接的に表現されている。Kには助手のアルトゥルとイエレミーアスの区別がつかない(全集VI 25)。アルトゥルとイエレミーアスは、個人としてではなく助手という役割でしかKに関係しないのであって、その助手としての機能がなくなれば、Kには彼らを識別する手段がなくなってしまう(Vgl.全集VI 259)。

アウト・サイダーのはずのKが、実は城一村の人たちのものの見方に染まってしまっているのである。長い冬が続く凍てついたこの村では、人々は互いに孤立して生きている。女中のペービ、教師のギーザ、そして村長夫妻、だれもが孤独である。その一方で「お互いにゴシップのご馳走をし合っている」村人たちがいる(全集VI 229)。アマーリア・エピソードに現れているように、それはあくまでもゴシップにすぎず、事の真相を究明しようというのではない。「いつもなにか新しい話」を聞こうと、舌なめずりをしているが(全集VI 32)、それが本当の話かどうかなどはどうでもいいのだ。情報はあふれているが、情報の中身は問われない。これは城の役所もおなじである。ソルディーニの事務室では書類が山のように積みれ、それが絶えずくずれ落ちている(全集VI

77)。秘書のモーモスの作る調書をクラムは読むことがない。その目的はただ「きちんと整理しておくこと」でしかない(全集VI 130)。情報の氾濫は、逆に人々のコミュニケーションを妨げる。書類は次の書類を生み(測量師採用の件を見よ)、役人の仕事を増やし続ける。「何のために」という目的はもはや存在しない、機構の自己増殖が進むだけである。

利用できるものは何でも利用しようとするKは、この城一村の世界にとり込まれてしまっている。では何故Kは城一村に受け入れてもらえないのか、何故よそ者のままなのか。それはKが城へ到達しようと戦い続けるからである。自分たちの罪を許してもらおうと様々な手を打つバルナバスの家族たちは、この点でKと共通している。バルナバスの家族たちも村八分の扱いを受けているが、それもアマーリアの事件を解明しようとしているからである。オルガの言うように、「ぶらりと出かけて行って、こちらからすすんで昔ながらの交際を復活し、ただ手紙の一件だけは、おくびにも出さないようにしさえすれば、それで十分だったかも」しれないのだ(全集VI 233)。「何故」という疑問を抱かずに、機構の働きに流されていけば、すべては片付いたかもしれないのだ。

もちろんよそ者のKは、この村を去って他の土地へ移住することも、自分の故郷へ帰ることもできよう。しかし、たとえ他の村へ移ったとしても、そこで自分の存在を承認させるためには戦わなければならない、それに失敗すれば、カール・ロスマンのように次から次への転落が待っているだけである。また何の成果も挙げられずに故郷へ戻ることは、グレゴール・ザムザのように社会的責任を放棄して家に逃げ帰り寄生生活を送ることではない。どこへ行くにしても社会との対決は避けられないのだから、Kは城へ到達するための戦いを続けざるをえないのである。

われわれ読者はKの探究に従って城の意味を追い求めるわけだが、それに対する答えは与えられない。領主のヴェスト・ヴェスト伯爵とはどんな人物なのか。城ではどんな人たちが、どんな生活を送っているのか等々。城はKの探究から、そしてわれわれの探究からも逃走する。しかし、主人公のKも、われわれの意味探究から逃走するという点では同じである。Kは本当に測量師の仕事を求めてこの村にやって来たのか。Kの言う「戦い」(全集VI 10)とは何なのか。Kは一体どこから来たのか……。われわれの疑問は、はぐらかされる。Kは城に戦いを挑むが、同時に「何故」と問いかけるわれわれから逃走している。Kの城との闘争は読者からの逃走でもある。

まとめてみよう。1912年の作品は、父親と息子の対決が基本的な構図となっている<27>。主人

<27> 「この父と子の葛藤は、『ユダヤ人の過渡期の世代』の問題をとびこえており、過渡的時代に特徴的なことだった。……父親殺しは、第一次世界大戦のころには、文学の最も重要なテーマとなった。」(フィッシャー 128f.) / 「子供を食い殺す父親形象」という点での表現主義との関係は、ゾーケルも指摘している。(Vgl.ゾーケル 63)

公は、経済的・社会的な自立に、父親を越えることに失敗して死んでいく。主人公は父親との戦いから逃走して、父親の判決を素直に受け入れる。また、カフカ自身にとっては、書いている時の陶醉感、作品を生み出す時の生みの苦しみが<28>、日常からの逃走が何よりも大切だった。

1914年の作品では、社会機構の中での主人公の死が物語となっている。主人公はシステムに戦いを挑みはしない。「流刑地にて」の士官は、システムの変化に対応できず、古いシステムの象徴である処刑機械とともに滅んでいく。しかし、システムが滅んだわけではない。前司令官が死に、新しい司令官がその地位に就いたとしても、システム自体は、単に変化したただけであって、滅びはしない。士官はこのシステムに逆走しようとしたが、結局逃げ切れなかったのだ。ヨーゼフ・Kは、ある朝、物語の中に巻き込まれ、受け身のまま死んでいく。彼は裁判組織に本気で立ち向かい、自ら物語を展開しようとはしない。犬のように死んでいくヨーゼフ・Kには、士官同様、「ゲオルクやグレゴールが死ぬ時に感じた悔恨、感動、愛が欠けている」（ゾーケル 276）。もはや死すらも個人的な体験としては残されてはいないのだ。死は芝居があった<29>、機械じかけのセレモニーとしてシステムの中に取り込まれ、もはや救済を約束することなどない。人間は死によってすらシステムから逃走することはできず、その人間が死んでも「恥辱」は生き残り、記録されるのだ。

1916年以後の主な主人公は、闘争する主人公である<30>。主人公は受け身のまま自分の処刑を待ちはしない。ロート・ベーターは人間社会に飛び込み、混乱を引き起こす。Kは様々な手段を講じて城へ侵入しようとして、自分の物語を展開する。執拗に城を追いかけるKは、何か絶対的な真理を信奉し、それにつき進んでいるかのように見える。だが、Kの闘争から何か統一的な意味を読み取ろうとしても無駄である。われわれの閉鎖的な読書行為を突き破ってKは逃走していく<31>。

<28> 「この物語（『判決』）はまるで本物の誕生のように脂や粘液で蔽われてぼくのなかから生れてきたものであり、ぼくだけがその体に届くことのできる、またそうする気のある手を持っているからだ。」（全集Ⅶ 214）

<29> 二人の死刑執行人をヨーゼフ・Kは「老いぼれの下っ端役者」だと考える（全集Ⅴ 191）。

<30> もちろんすべての主人公がそうだというのではない。たとえばゾーケルは、「村医者」は内容的に、後期にはなく中期に属すると考えている。Vgl.ゾーケル 311f.

<31> 「このような読み方でヴァルター・ベンヤミンはフランツ・カフカを読む。カフカの小説は、真理という内容をともなうことなしに伝統的な物語の形式を受け継いでいるというのである。表象にかかわる伝統的イデオロギーの全体が危殆に瀕している。が、だからといって、真理の探究が放棄されてしまっているわけではない。ポスト・モダニズムは、これと対照

一方、「書くこと」がカフカ自身の逃走の試みであったことは、終生変わらなかった。ただ、「判決」の場合のように執筆時の陶酔感が目的ではなくなっていたが。

「ぼくは書くことによって……自立と逃走のささやかな試みをかさねてきました。もちろん成果は微々たるものでした……にもかかわらず、この試みをたいせつに見守って、自分で防げるかぎり危険を近寄せない、いやそもそもそうした危険の可能性を断ってしまうことが、ぼくの義務であり、それどころかぼくにとって生きるということ自体なのです。結婚は、そうした危険のひとつを招くかもしれぬ可能性です。」

(「父への手紙」全集Ⅲ 166f.)

三度の婚約にもかかわらずカフカは、彼の描く登場人物同様、独身のまま一生を終えるが、それは必ずしも、ゲオルクやグレゴールのように父親に屈伏し、父親の元へ逃げ帰ったからではない。独身とは、より深い意味での父親への挑戦であったのだ。

「結婚は、たしかに、最も先鋭な自己解放と独立を保証してくれます。……それはぼくの見方からすると、ひとが達成しうる最高のものであり、したがってまた父上が達成された最高のものでもあります。ぼくは父上と対等になれましょう。……しかしここで、はやくも暗雲がきざしはじめます。……警えてみれば、牢獄につながれているのに、逃亡の意図ばかりか……さらにそのうえに、しかも同時に、牢獄を自分用の別荘に改造するという意図をもつようなものです。だが、逃亡すれば改造はできないし、改造していれば逃亡はできないはずです。父上にたいして独特な不幸な関係にあるぼくが自立するためには、できうれば父上とは全然無関係なことを、何かやらねばなりません。結婚は最大の行為であり、このうえない名誉にみちた自立性を与えてくれますが、しかし同時に、父上と最も密接に関係してくるのです。この行為によって脱出しようとすることは、したがってなにがしかの妄想を含み、そしておよそいかなる試みも、妄想をとまえばまちがいに罰せられます。」(全集Ⅲ 165)

ドゥルーズ／ガタリも言うように、結婚とは父親からの独立であり、「オイディプスの外に出ることだといわれているが、しかしそれはまたオイディプスを再生産し伝播していることなのだともいえるわけである」(ドゥルーズ／ガタリ 92)。カフカは「書くこと」を妨げる危険があるがゆえに結婚を諦めるが、それは父からの逃走であると同時に、家庭の再生産から、つまり社会の要

的に、表象にもとづくこの特異な認識論の信用の失墜を、真理そのものの死に等しいと信じるといふ、黙示録的な錯誤を犯している。」(イーグルトンb 249)

求するオイディプス化の流れからの逃走であり、また闘争でもあった。一方で、そのカフカの書いた作品はわれわれの意味探究作業から、「文学を<既成秩序に適應した消費対象>に還元し、<何びとも害を及ぼすことのないもの>にしてしまおう」（ドゥルーズ／ガタリ 167）というもくろみから、つまり文学を再オイディプス化して社会の中に取り込んでしまおうとする試みから逃走する<32>。そしてその逃走とは、様々な民族、文化、世代が雑居し、それをエネルギー源にしていたプラハからの、「あらゆる内部の葛藤にもかかわらず不動であった」プラハからの逃走でもあった。この意味でカフカの生と、「書く」という行為、そして書かれた作品が重なり合う。

ミレナへのある手紙でカフカは、「本の本当に独立した生命というものは、作家の死後に、もっと正しく言えば、死後しばらく経ってからようやくはじまります」と書いている（全集Ⅷ 203）。そうしてみると、様々な解釈を引き起こしてきたカフカの作品は実に波乱万丈な人生を歩んでいるといえよう。カフカの作品が今後も、既成概念の枠の中に押し込めようとする<文学批評>の戦略から逃げ続けることができるか、それとも<古典>として文学史の中に取り込まれるかは分からないが、逆に言えば、批評の使命とは、文学理論が「実際には社会的イデオロギーの一分野以外のなものでもない」（イーグルトンa 314）ことを自覚しながらも、作品をシステムの馴致作用から解放し、作品を新たに活性化し続けることであろう<34>。

<32> 「資本主義の種々の生産活動やその芸術やその科学は、脱コード化し脱土地化する種々の流れを形成している。これらの流れは、たんに対応する公理系に服従するばかりではない。むしろ再コード化や再土地化の下をかいくぐり公理系の網の目を貫いて、いくつかの水流を流通させるものでもあるのだ。」（ドゥルーズ／ガタリ 448）

<33> 「活性化とは……作品の、未来を指し示している意味を、その都度ごとに歴史的弁証法と対決させ、テキストの発展のために、現時点、現時点で、読者とテキストの隠された論争を実り多いものにするのであり、カフカの急進性を、未来を補助するものとして、まだ現れていないものめがけて投入することである。」（バイケン 198f.） / 「いや、さらにこうも言えるだろう、現代の批評研究は、たとえつつましかであるにせよ、私たちの生存に貢献するかもしれない、と。なぜなら、いまや確実に明らかになりつつあることと言えば、それは、象徴過程が政治権力を行使したり強化するとき利用され、また政治権力に抵抗したり時には政治権力を転覆するときにも利用されるということだ。……もし批評の未来が、ブルジョワ国家体制に対する闘争としていま定義されなければ、批評には未来そのものがないかもしれないのだ。」（イーグルトンc 178f.）

*

テキストからの引用は『決定版 カフカ全集』I～XII，新潮社 1980～1981 を用いた。なお引用のローマ数字は巻数を、アラビア数字はページ数を表す。

参考文献

- Anders, Günther: 「カフカ」前田敬作訳，弥生書房，1971
- 浅田 彰: 「構造と力」，勁草書房，1986
- Beicken, Peter: Kafka heute. Aspekte seiner Aktualität, in: Franz-Kafka-Symposium 1983, hrsg. von Wilhelm Emrich u. Bernd Goldmann, Mainz 1985, S.159～199
- Binder, Hartmut: (a) (Hrsg.) Kafka-Handbuch Bd.1. Der Mensch und seine Zeit, Stuttgart 1979
(b) Kafka-Kommentar zu den Romanen, Rezensionen, Aphorismen und zum Brief an den Vater. 2., bibliograph. erg. Aufl., München 1982
- Brod, Max: (a) 「フランツ・カフカ」辻 理 他訳，みすず書房 1972
(b) Der Prager Kreis, Frankfurt a.M. 1979
(c) 「呼称—自伝より」平田達治訳，in: 「ブラハ、ヤヌスの相貌」，国書刊行会 1986, S.69～72
- Eagleton, Terry: (a) 「文学とは何か」大橋洋一訳，岩波書店 1986
(b) 「批評の政治学」大橋洋一他訳，平凡社 1986
(c) 「批評の機能」大橋洋一訳，紀伊国屋書店 1988
- Deleuze, Gilles / Guattari, Félix: 「アンチ・オイディプス」市倉宏祐訳，河出書房新社 1986
- Eisner, Pavel: 「カフカとブラハ」金井 裕他訳，審美社 1975
- Fischer, Ernst: 「フランツ・カフカ」五十嵐敏夫訳，in: 「カフカ論集」，国文社 1975, S.116～196
- Haas, Willy: 「古きブラハのさまざまな秘密」平田達治訳，in: 「ブラハ、ヤヌスの相貌」S.21～59
- 池田浩士他: 「カフカの解説」，駸々堂，1982
- Janouch, Gustav: 「カフカとの対話」吉田仙太郎訳，筑摩書房 1973
- Kohn, Hans: 「ハプスブルク帝国史入門」，恒文社 1985
- Luhman, Niklas: (a) 「社会システム理論の視座」佐藤 勉訳，木鐸社 1985
(b) 「社会学の基礎概念としての意味」佐藤嘉一訳，in: 「批判理論と社会システム論 ハーバーマースルーマン論争」，木鐸社 1987, S.29～124
- Politzer, Heinz: Franz Kafka. Der Künstler, Frankfurt a.M. 1978
- Sokel, Walter H.: Franz Kafka. Tragik und Ironie, Frankfurt a.M. 1976
- 恒川恵市: 「世界システムと多国籍企業」 in: 「国際政治」82号 世界システム論，有斐閣 1986, S.26～41
- Urzidil, Johannes: 「カフカの足跡」福永輝雄訳，in: 「カフカ論集」，S.32～99
- Wagenbach, Klaus: 「カフカ」塚越 敏訳，理想社 1982
- 矢野俊隆: 「ハプスブルク帝国史研究」，岩波書店 1977

(大学院博士課程)